

経営者「環境力」クラブ勉強会②

事務局

12月号に続き、11月24日(水)開催の、経営者「環境力」クラブ勉強会の話題提供をご紹介します。

企業から見たグリーン化と脱成長

講師：石川 武氏

(三共精機株式会社 代表取締役会長)

機械工具を扱う商社として製造業の課題解決を担い、地域や人のご縁を大切にサステナブルな経営を目指している。一方、日経新聞が扱うような企業にとって、環境は「次の市場」であり、環境への取組は「成長へのテコ」、「優位性確保へのワード」に過ぎないのではないかと。これでは2050年までに1.5℃昇温に抑えるのは難しい。斎藤幸平氏だけでなく、最近では若手研究者の資本主義研究が進み提言も出ているが、結局は節度のない人間の欲が問題なのではないかと思う。

昨今、企業は社内外の多岐にわたる課題、すなわち、働き方改革、ジョブ型雇用、ダイバーシティ・インクルージョン、SDGs・CSR・ESG投資、コンプライアンス、秘密保持、BCPなどへの対応が求められ、組織存続にコストがかかる。グリーンウォッシュをっていると各課題への対応に齟齬が生じ、結果としてコスト高となり、企業の存続に関わる問題となろう。「地球環境」だけでなく、格差、差別、長寿、AI、紛争など、企業が社内外の多岐にわたる課題に対応しなければならない時代である。強制されてやるのではなく、自発的に行動したことが課題への対応になるという流れを作らないとやっていけなくなるだろう。それが結果としてSDGsにつながる。「良く」生きるために仕事に向き合えば、自分の思いが社会からの要請に一致するのではないだろうか。

三共精機は、環境破壊の原因となる工業界において、未来を考えて資源の有効活用を提案してきた。更に森林保全などの活動を通じ、健全なものづくり人材を育てようとしている。こうした環境活動は事業の再構築、再認識につながると実感している。

結局は会社の仕事は、事業活動だけでなく、そのための教育までも含めたひとつのエコシステムにならざるを得ないのではないかと。SDGsは単に「17の項目」側から見て、どれかを目指すという考え方ではなく、自社がこれまで存在して来た仕事の本質や、強みややってきたことを再確認し、その上で未来にどんな価値を提供したいのかを自ら考え言語化し、その上で「17の項目」に合うものがあれば選ぶ、という形で使えば良いのではないだろうか。最も大切なことは社会課題(環境、人権、平和等)が経済活動の前提として本当に大切なことだと各人が本気で思うことであり、本気で取り組む企業はESG投資家にも魅力的だろう。

コロナ下の2年は、京都の大学で「大人の学び直し」を実践し、その中の1つで「有人宇宙学」を学んだ。2021年は、民間人の有人宇宙飛行元年とも言える年になったが、宇宙移住の動機や可能性を考える程に、地球環境を守る大切さを痛切に感じる。これからのビジネスは、自社の目標達成だけを目指す「狙い」型から、未来のために本当にこうしたいのだという「願い」型に、シフトしていかなければならないのではないかと考える。

(文責：事務局)